

ずいそう

「ちょっとだけ」ベトナム
・中国

佐々木輝夫

本年7月初旬に東アジアにおける河川ポンプ施設等の技術調査を目的とした調査団に加わり、ベトナム及び中華人民共和国（「中国」と略称）の2カ国を7日間で見聞する機会を得た。

ベトナムではハノイ市の西75km地点で稼働中のホアビン水力発電所（240MW×8基）が調査対象であった。

ハノイ市内のホテルから早朝8時に大型バスで現地に向かうため市街道路に出たところ、通勤ラッシュと重なりバイクの洪水で路上が立錐の余地がない有様で、さながら、わが国の昭和30年代の道路状況以上とも思われた。また、ガイドの説明によると交通取締側はラッシュ時の大型バスを運行禁止にしており、一方、観光行政側は観光振興のため大型バスを走らせたいというミスマッチの面があるということ、どこの国にも有りそうなことである。

移動中のバスの車窓から見た民家は、ほぼ同じ構造形式で長方形の3階建てながら、ベランダ又は屋上の手摺りが各戸とも、すべて異なったデザインで、かつ、重厚であり、ベトナム人の誇りをみた思いである。

本題の水力発電設備は、旧ソビエトの技術援助のもとに1979年から18年をかけ1997年に完成したもので、ベトナム全土の水力発電量の37%をまかなう重要な発電所であるが、操作制御設備が非常にシンプルに感じたほか、4年に1回実施しているオーバーホールを含めて自国の技術で管理運営されており、一部の部品（軸受け、制御盤等）を国外から調達しているようである。

次の調査対象である中国・江蘇省江都市の江都ポンプ場には、ベトナム・ハノイ市から香港経由で空路南京市の移動したが、南京市の北東約100kmの距離にある。

バスから見る南京市は優雅なたたずまいをみせ、早朝のラッシュ時間帯も車の流れが物静かに見えた。さらに南京市の交差点信号が変わっていたので、報告したい。

わが国において、十数年前に現道の工事現場で待時間表示機能付信号機を試験導入したが、南京市では全交差点に設置されていたことである。また、交差点にはビデオカメラが設置され

て常時交通監視しており、交通事故防止に注力していることが窺えた。わが国でも交通事故防止に種々の施策がとられているが、参考になるように思えてならない。

江都ポンプ場は中国の「南水北調計画」という壮大な計画の一貫として4機場、35台、総吐出力508 m³/sで、1963年～1977年に完成された。機場内の運転監視設備はいたってシンプルで、運転状況把握用のパソコンが1台置かれていた。もっとも運転制御は、遠隔中央制御方式で、現場は運転制御の権能を持たないようである。

今回の訪問でポンプ設備のセラミック軸受の実用化情報に触れると中国側が強い関心を示した。今後の技術交流の成果に期待したい。

中国での2番目の調査場所は上海市中央を西から東に貫流する蘇州河の浄化のために建設中の石洞口都市污水处理場である。設備は標準活性汚泥方式の日量80万トンで、年内に1/2の施設の完成を予定したものである。

施設の建設・運転管理はすべて中国共産党、上海市の指導のもとに会社組織で実施していることに注目したい。会社が資金の調達から建設、運転管理、借入金の返済のすべてを行うものである。下水道料金の徴収は上海市が担当するとのことであるが、わが国の公共部門の民営化の議論が噴出していることもあり、興味あるテーマである。

上海市内は、新たに開発する地域とともに旧租界の再開発が急ピッチで進められており、活況には目を見張るものがある。高層ビル群にいたっては、すべてがユニークなデザインで、どれ一つとして同じ顔をしていないようで、地域の個性の豊かさが感じられた。

さらに上海市が強力に推進しているものに緑化対策が挙げられる。一例として上海市内の高架道路の高欄の外側にプランターを設置して植物を植えている光景が延々と見られたほか、再開発された土地にも大きなスペースを割いて緑豊かな樹木が植えられているなど徹底した施策が印象的であった。

以上、今回の調査の主題にふれず、独断的な感想のみに終始したもので、いささか面映ゆい気がするが、参考とすべきヒントもあったように感じている。

なお、技術報告書は、主催した社団法人河川ポンプ施設技術協会（連絡先：同協会技術部、電話03(5562)0621）がとりまとめているので、ご参照いただきたい。